
小説恋愛

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説恋愛

【Zコード】

N60120

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

本が好きな人の、ほんの少しの、本の話

(前書き)

あなたせどりでトーークをしますか？

僕らの「デート」は本屋さんだつた。

正確な日本語ではないので訂正。「デート」は本屋さんで行われた。

今では一種のアミニューズメントパークと化した、郊外にある大きな本屋で時間をつぶす人も多いだろう。

でも、僕らの過ごし方は普通の人みたいに読みたい本を探し、軽く立ち読みするに收まらなかつた。

僕は、本が好きだ。

雑誌だろうが専門書だろうがエロ本だろうが哲学書だろうが、そこには書き手の想いが込められている。

何かを伝えたい、何かを残したい、そういう想いが形になつたものが本であるとすると、線香花火のような最後にはポトリと落ちて終わる人間の一生の中にも、一種の逃げ道があるおうに思えるのだ。

僕は、本を読むことでその書き手の人生に触れると思つてゐる。絶対に会うことのなかつた遠い異国の人間と、ちっぽけな島国の平凡な僕との人生がクロスする。

「じゃあ、シェイクスピアがお前のこと知つてんのかよ?」なんて意地悪な話はこの際無しにしよう。彼にとつて僕がどうなのかといふよりも、僕にとつて彼がどうなのか、ということのほうが大事なのだ。

そつ、本を読むつて行為は、書き手のヒーローと読み手のヒーローのぶつか
りなのだ。

「俺の想いよ、世界を駆け巡り万人に届け」

「こんな話知るか、勝手なこと書いてるんじゃねー」

閑話休題、話を戻そう。

僕らの『デート』は本屋さんだった。

私達の『デート』は本屋さんだったよ。

今じゃ、大きな本屋さんがいっぱいできてるでしょ。

あーゆー大きな本屋さんって、いいわよね。

なんか先人の知識がいつぱい詰まってる感じ。もちろん、どーでもいいことってたくさんあるけど、その中には私にとって宝となる知識があるはず。

そつ考えると、本屋さんに行くだけでワクワクしていくわね。

そもそも、本屋で『デート』つてのもどうかと思つのよ。

だってさ、本を読むつて一人でする行為じやない。周囲は関係ない。強いて言えば、読んでいる私と書き手の一人の関係じやないかしら。

そつがえるとデーターで本屋に行つて恋愛小説なんて読んだ田口は、浮氣を公然としているようなものじやない。

私は浮氣はいやよ。するのもされるのもいや。でも、あの人は本が好きなの。本が好きといつよりは、本を読んで知識を得て成長した自分に出会つのが好きとこつたところかしら。

私は何なのつて思つちやつわよね。ちょっと悲しい氣がする。

でも、次のデーターも本屋さんになつちやうのよ。

どうしてかつて？

どうしてかだあ？

んなもん簡単だろ。本を読むつてことで、俺は俺じやなくなることができるんだからさ。

俺が例えばヤクザ物読んでも変わらんけど、絵本を読んでみるよ。俺は子どもになつちまうんだ。

殺人犯の手記を読めば、人を殺した奴になれるし。

天才外科医の話を読めば、俺も人を救えるんだ。

俺が純愛小説だあ？んな柄じやないけど、でもたまに読んでみるのよ。

けつこうにいもんだぜ。心がよ、落ち着くつて言つつかよ、なんてゆーか、いや、なんて言つていいかわからんぜ。

実際よ、その女の子の気持ちがわかれば、その女の子になるつてこ

ともできぬつて訳や。

だからデートは本屋つて決まつてんだよ。

だからデートは本屋になつてしまつたよ。

書き手の気持ちを私は受け止める事ができるわ。それは、大きな恋だつたり、途方もない悲しみだつたりするのだけれど。

本屋に足を運ぶたびに私はいろんな気持ちを受け止めるわ。

すばらしい恋愛の中幸せな娘もいれば、不幸せな結果に終わつてしまう娘もいるのよ。

いろんな本の中で、私はいろんな恋をする。

それは男だつたり、女だつたり、子どもだつたり、大人だつたりするのだけれど。

だから私達のデートは、

いや、私のデートは、

いや、俺の、

いや、僕のデートはいつも本屋なんだ。

今日のデートはどれにしそう?

と、一人でつぶやきながら一冊の本に手を伸ばした。

そこへ同じように伸びてきた手が。

触れる手と手。

「あっ、ごめんなさい」

「あっ、すみません」

同時に手を引っ込む。

「どうぞ」

「どうぞ」

ドラマみたいな現実が、時にこの世には待つてこる。

少しばかりのきまづい間の後。

その人は、こちらをまつすぐと見つめながらつぶやいた。

「本、お好きなんですか？」

「えつ…しゅきです！」

声が裏返つたけど、その人は優しい目をして微笑んだ。

次のデートは本屋じゃなくなるかも知れない。

(後書き)

ヒル、ホルム。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012o/>

小説恋愛

2010年10月31日02時39分発行